

Title	伝統工芸意匠の再検討 : 伏見人形の成立とその周辺
Author(s)	片山, 行雄
Citation	デザイン理論. 1963, 2, p. 45-60
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52438
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

伝統的工芸意匠の再検討

—伏見人形の成立とその周辺—

片 山 行 雄

I. 伝統的工芸技術の問題点

日本の工芸文化の特長的な姿は、その揺籃期において、地域的閉鎖の歴史的、社会的な条件の中で、極めて集約的な醇化の過程をへて形成されたものであった。それはただ一つの開口部をもつ壺中の世界において、自然醗酵の形で醸成せられる醇醪にたとえる如きものであろうか。このような文化をはぐくむ静謐な社会環境の基盤は、西欧諸国に類型を求めることは出来ないであろう。

純正芸術一般には求めることの出来ない、工芸のみがもつことの出来る美の要素は、人間本性にもとづく真に工芸的な欲求が探求し、習熟して把握し得た「材質」と「技術」との二つがその過半の運命を負うものである。

上代からの胎動・成育の時期を経て、中世の末の自律的、精神的閉鎖の場で到達することの出来た「雅」の技術美と、江戸時代の現実的な材質自体の他律的閉鎖の中に成立する「粹」の技術美とは、いずれも共に人類が到達するこの可能な究極の世界であり、日本が真に世界に誇り得る唯一のものであろうと思う。雅も粹も、工芸の技術的美を言い表わす適切な言葉とは云い難いが、特別な表現の方法がないので今この文字をかりる。雅とはひなびに対するみやびではなく、精巧に対する雅致であり、粹は野暮に対するいきよりも、むしろ豪華に対する瀟洒の概念に近い。これらはいずれも、工芸美を享受する特殊な趣味態様として存立しなければならないし、それは又、材質、材感に対する完全味得、理解の上にもみ成立つ所のものである。雅なる技術的美の世界は、末

完、不整正の姿の故に、又粹なる技術的美は不可視、不顕の状態の故に、いずれも共に麁相の外貌を示すものである。雅の本質は透徹した心情のうごきがこれを感じし得るものであるが、粹の本体は身体的動作によらねば知覚することが出来ない。いずれも単なる生理的視覚によって捕捉することは不可能である。雅は不完の状態に形体をとどめ、晦渋に代位せしめた色相をもって現象の表皮をおおう。粹の内方性はもと支配者の法や権力の抑圧に対する抵抗に発し、フラストレーションの充足を求めて不可視的な場に至上の贅美を尽すことを試みる。雅は形而上的に現象を陰蔽する技術的過程によって、真実の相の内奥にあることを暗示し、粹は享受と提供との間の微妙なところの交流に結ばれ、形而下的な美の存在を不顕ならしめる技術的方法である。技術的なものと材質的なものの背後の深層の美に到達する時空の距離が、余韻、余情の残像としてとどめられる所に、これらの特殊性が認められるであろう。

これら特殊の工芸の美は、純正芸術の如く表象を単に感性的素材の中に固定せしめることが目的ではない故に、技術美と称すべきであるかもしれぬ。而しこれらの技術美は、単に人間の物を造り得る能力に発した、機能概念の世界だけでは理解し難いものを含んでいる。西欧伝統の技術美の如き、目的も有する合目的性の反省の単純低級なるとは比較にならぬ。その技術美は恰も鏡面の完全反射に似て、表面的観照にととまるが、日本の伝統的工芸の技術美は、対者の表象を作品の内方に吸引して、作者の表象と合一せしめずにはおかぬ。これら技術美の結果としての作品は、現代芸術がしばしば普遍的観照にたえ難い人間疏外の表現を続けるに對し、開拓すべき抽象美の世界のあることを示唆するものであろう。

九月のある雨の日に、聖護院に近い木匠碧外翁の工房をたずねた。彼はこの数年来手がけている、高村光雲作の聖観音を安置すべき厨子の製作中であつた。その仕事は現代では稀に見ることの出来る、伝統的技術の典型ともいふべきもので、そのすべての部分に含まれる技術美を視覚にとらえ

ることは、正統的な木匠のみがもつ、材質と技術への理解なくしては困難であろうと思われた。その特長的な素材としての桑の木目は、彼が二十歳の頃福井の田舎で発見し、すでに五十年近い年月を経たものときく、その桑の木の上に流れた半世紀の時間は、既に木材本来の反狂性を払拭して、今円熟した老匠の手によって永遠の生命に生かされようとしているのであった。

前赤壁の賦の淡い面賛をもつ、先代道八の小碗に玉露をくんでくれた彼の手元に、物さびた黄銅の湯沸しがおかれ、たがね彫りの精緻な秋草もおはぐろ色の渋味におおわれ、銀の露滴のいくつかがかすかに光った。心にくい美しさにひかれ、手近かにかりて蓋をのぞけば、内部はすべて部厚い純銀の打ものであった。

次の日に金沢から来京した伝統工芸関係者との懇談会の席上で、京都側のY氏から漆器をたたみの上で製作する事の非能率が強く指摘されたが、能率や生産性とは関連のない世界で営まれるこれらの仕事を、単に嘲笑しおおせる人があるなら、彼らはむしろその無智を嘲笑するにすぎないであろう。

今日の伝統工芸を単に一つの企業としてのみ見るならば、悩み多い数々の問題をかかえて困難な道を歩んでいるのは事実である。ただ企業としての外に占めている大きな意義を見落して、近代設備の大工場でベルト・コンベヤーに乗って生産される事をのぞむなら、その時、伝統の技術美は姿を消すことであろう。

現状の社会分業体制による企業規模の過小零細性や、技術、設備の前近代性、感覚面での非現実性など、卑近な問題も数多いが、基本的な重点的を外しては、角をためて牛に殺す結果になりかねない。第一は敗戦の劣等感をもたらした、自国文化に対する過小評価を改めることである。日本民族の伝統の美とは全くうらはらな、物的消費を求めてさまようことの空しさをやめて、日常

的生活空間の中にも価値創造の深い喜びの存することをさとるべきである。高度な技術が正当に酬われるためには、現在の流通過程は改められねばならぬ。デンマークにおけるデン、パーマネントの様な組織を採用することについては、国家も地方自治体も本気になって熱意を示すべき問題である。

亡びんとする伝統技術の一つとして、伏見人形現在の実体にふれてきたが、久しい年月をかけて成立した文化に対しては、恒久的な施策が重要であって、弥縫糊塗の方策は有害無益であるとの結論に達した。

伏見人形の歴史的事実に関しては、極力曖昧な文献を排し、技術的側面の追及から瓦成型との関係を明らかにしたこと。伏見人形成立の初期の恩人たる人形師幸右衛門抹殺説を排したこと。でんぼうの語義についての誤解を正したことなど、すべて未だ不充分乍ら新しい意義もあると思うので略述しておきたいと思う。

竹田出雲の浄瑠璃に表われているところから、壺々やでんぼうの類は伏見人形初期の時代から作られ、近代に至る迄作られていた品種であることが知られるにもかかわらず、現在残っていない。初期において、半ば実用的な土器製品と、着彩された禽獣土偶類との何れもが存在した事が明らかであり、当時の陶業を反映して、それらが三種の別個の成型法に分れていたことがわかる。つまりでんぼうはロクロ成型であり、つぼつぼは手造りで他はすべて押型成型である。現在伏見街道唯一軒の窯元大西家において、でんぼうとつぼつぼに関して其形状すら判らなくなっていることは、大西家が押型専門の家であった事を物語るものである。

明治三十五年の奥書をもち、同四十四年に芸艸堂から刊行された清水晴風氏のうないの友によって、でんぼうが轆轤による土器製であることを確かめ得たので、今回復元の模品を作ったが、現在迄の伏見人形の他の諸記録と共に、伝統技術の将来のために保存しておきたいと思う。

Ⅱ. 成立の要因と歴史的背景

凡そ特定の産業が特定の地に発生し、発展をとげるについては、種々の条件が整わねばならないが、交通運輸の未発達時代においては、原材料と技術との二つは最も基本的な条件であろうと思う。土人形の芸術を伏見の地に成立せしめるに至った諸般の原因について、少しく歴史的に回顧してみたいと思う。

伏見深草の地が陶土を産し、早くより陶業の開けた事については日本書紀に記されている。即ち雄略天皇十七年、土師連吾笥が、攝津の工人、山城府見村の工人、伊勢その他の民部を献じ、供御の器を作らせたとあり、贄の土師部と称せられたこれらの人々の記録は、伏見陶窯についての濫觴を見る事が出来る。而し記載によれば、当時既に伏見村に工人の存在した事が知られ、その起元が更に古い事を物語っている。奈良朝には秦一族の聚落地として、秦の長者伊呂呂による稻荷社の創建があり、彼らの生活から陶業の進歩を想像する事が出来る。末期の行基による殖産事業は、京都においても製陶製瓦の法を伝えられており、その伏見深草との関連も古いと思われる。平安京の造営に際し、製瓦の業が栄えた事は明白であるが、秦一族の隆盛や稻荷神社に対する歴朝の尊崇は、この地を繁栄させる充分な理由となったに相違ない。仁明天皇は深草の地に葬むられ、深草の帝と称されるが、淳和朝に稻荷社の神崇に際し、従五位下を授けられてより、朱雀朝に正一位を贈られる迄、稻荷社の権威の増大と共に此地が重要な意義を持ち初める事が知られる。中期以降深草は景勝の地として貴族の別業の地と化し、数多の寺院の建立も行われた。

陶業については後鳥羽、伏見両朝の記録を見る位で、凡そ平安以降の日本文化は、檜皮葺の神殿造りや、漆工文化の時代で、陶業も製瓦も沈滞の時期である。鎌倉期に瀬戸開窯に先立って、加藤四郎左衛門が深草の地で製陶したというのは単なる伝説であろう。室町期に及んで深草焼が登場し、初めて施釉の陶器や型物の小器物を造り出すに至る、而して安土以降の時期には築城の盛行と当時伝来した明代の進歩した製法によって、此地の製瓦は再び繁栄をとりもどす。凡そ瓦と一般陶磁器とは古い時代において区分がない事は、中国において

も同様であった。吾国でかわらけと称している素焼の皿は、瓦筒の義であつて、瓦製の浅い器物の謂である。土人形を指してかわら人形と呼んだのも同様である。伏見深草は豊富な原料の故に上代から陶業が開けたが、其製品が近代迄瓦の製作を続けていたという事は、伏見人形の成立に関し技術的に重要な意味を含んでいるのである。

凡そ陶磁器の製作は成型と施釉加飾と焼成との部門に別れるが、成型には手造りと轆轤と型物との三種の方法があり、型物は更に押型、鑄込みの二つにわかれる。型の材質は近代の量産には吸水性に富んで離型に便利な石膏型が使用されるが、古い時代は木型か素焼型を使用し、瓦の如き平面形の量産には木型が最も多く利用されたと思われる。木型によっては立体形の成型が出来難いところから、割型の方法を案出するに至るのであるが、室町末期の型物の小器物がどのような技術によつたかは不明である。深草焼の遺品として、俊成卿の古歌によつた辻井播磨作鶉香合の如きは、素焼型で成型出来るものである。この作品は余りに小器物であるため、技術的問題としてとり上げるには不適當と思われ易いかも知れぬが、只この作品が押型による二個の部分から成立している所に、伏見人形の成型技術に関する重要な示唆をもつことを見逃してはならないのである。工芸志料其他によれば、伏見人形初期においては、素焼された二個の部分を膠で接着し、一個の立体造型とした後着彩したと伝えられるから、現在の様な型起しをした二個の素地を、生のままで接ぎ合せて後焼成する技術が何時の頃創案されたか不明であるが、技術的進歩の経過と凡その年代とを知ることが出来るのである。陶磁器の器物成型の大宗は轆轤によつたのであり、型物の技術は瓦製造の側に発達するものであるが、伏見深草の陶窯においては、図らずもこの両者が共に存在し発展した事が、遂に優れた土人形芸術を成立させる大きな原因となつたものであろう。

楽家に「赤楽獅子の鬼瓦」の雄作が伝えられているが、作者長次郎も瓦職人であつたと考えられる。今戸焼の半七も、博多の正木宗七も、伏見の幸右衛門

も、土人形の創始者はいずれも瓦職人であり、土人形発祥の地はすべて瓦の産地であった。まことに伏見人形は、瓦やく窯の中から呱呱の声を上げたもの様である。伏見人形爾後の繁栄は遂に伏見をして土人形の生産地と化せしめ、初期の幸右衛門、中期の松本五三郎、末期の欽古堂亀祐の三人の偉人によって、江戸期の三百年間を、瓦も陶磁器も影をひそめる程の盛業のもとを拓いたのである。中期の作品として、九々翁の「伏見焼開運撫牛」が伝わっているが、灰黒色の瓦焼きであり、製作年代の延享は幸右衛門と亀祐とのほぼ中間に当り、中期の作風、技術を知る意味で貴重な資料である。この十八世紀中葉に作られた形式は、近代迄行われているものの一つである。伏見焼、深草焼として伝えられて来た製陶の伝統は、土人形生産の勃興によって本来の業を清水に譲ることとなったが、この人形の興隆については、更に幾多の原因があったのである。その一つは交通の便であり、当時西国との往復には伏見の港による淀川の船運を利用したもので、当時としては品質感覚において群に優れた新鮮な商品を、各地に撒布して実物宣伝をするについての交通の便は、はかり知れない大きな役割を果たしたものであろう。明治の頃にも、竹籠に梱包された伏見人形をつんで、伏見街道を港に向う大八車の数は夥しいものであったと伝えている。元禄の草子本にとり上げられる程、早い時代に江戸町民の間に浸透することが出来たのも、伏見がもし交通に不便な山間の地であつたら、到底考えられないことである。

今一つの要因は土産物的性格において、恰好の背景を有した事によるものであり、平安以来歴代の尊信を得て隆盛を続けた稲荷神社は、江戸期に及んで庶民、一般人士の信仰を集めて繁栄の極に達した。小身から身を起して老中に迄出世した田沼意次が、自家に稲荷神を奉祠する程の信者であったことから、江戸の町に稲荷を勧進するもの多く、各所に稲荷社が祀られる様になった。当時民間の俗語に、伊勢屋、稲荷に犬の糞と称したのも、誠にこの間の事情を明らかにするものである。稲荷信仰、本社への参拝は、稲荷土産としての伏見人形

を繁榮させたことは説明の用もなからう。

民芸辞典の編者某氏が、みやげとは宮箆の義であるとして、神社の祭事に関連ある如く語源を解説しているのは誤りである。土産はみやげの転であり、御宅、御宅田、屯田を称したもので、京都を遠く離れた皇家一族の私有地であった。屯田の産物を収納する屯倉もみやげと称された様である。この遠隔の地から京都にもたらされるものが「みやげもの」であり、都には珍奇である点を賞したものと考えられる。転じてそれは変った土地、珍らしい旅の先から自家や近隣にもたらされる「いえづと」をも意味する様になったもので、其本来の性格上みやげは珍奇であることが何よりの条件として尊ばれ、其みやげの背景が著名な土地、名所や大社名刹の信仰につながることは一段とその要素を高める事柄であった。かかる意味から、江戸期における伏見人形普及の一因として稻荷信仰、及び土産物的背景を考えることが出来るのである。

Ⅲ. 幸右衛門の業績と年代

庶民階級の間に、鑑賞の対象としての人形芸術が発生するのは、それらの階層の経済生活に、なにがしかの余裕が与えられる程度に商工業の発達が見られ、中世の桎梏から解き放された造型感覚が生れようとするとき、言い換えれば近代の曙光が訪れようとする時期をまたねばならなかったのである、日本の人形の歴史には、平安朝の信仰的な匂いの強い天児や、かたしろから雛人形への発展をたどる一つの系列があり、室町の末、能の面を打つ人達の技術を通して、御所人形、京人形へと発展するが、この場合においても、信仰的要素から解放され、観照的作品に昇華するについては、彫師達の目が人体造型の過程に物の個を視ることの出来る、近代精神の透過を必要としたのであった。埴輪における人体造型を、庶民の側の土人形の歴史に結びつけようとする試みは、多くの文献に見うけられるが、上述の意味で当たらないと思う。応仁につづく長期の内乱が終ろうとする頃、永正が十八年、天文が二十五年に近い年号を継続していることは、事変と改元との関連の歴史をみると興味深いものがある。

る。地方には土民の一揆が頻発し、中央の支配権は地におち乍ら、町衆は着々と自らの経済力を蓄積し、やがて花開くべき庶民文化のための社会的基盤を徐々に形成しつつあった時代と考えられるのである。養老の創始と云う肥後の木の葉猿は伝説にすぎないとして、長崎の古賀人形は文禄に発祥すると伝えられるのを始めとし、博多人形が慶長、今戸の土人形が享保、仙台の堤人形が元禄と伝えられている。伏見人形の創始者を、工芸鏡は天正中、工芸志料は元和元年としているが、天文の庶民文化胚胎期より数十年を経て、天正中より元禄にかけての凡そ百年の間に、日本の各地において郷土玩具土人形の類が完成した事を示しているものである。京都の文化に近く、豊富な原料とすぐれた技術とに恵まれた伏見人形は、その揺籃期を天文を中心とする時代に遡らせる事は無理ではないと思う。工芸志料は、元和元年伏見の人鶴幸右衛門と云うものあり、初めて小児玩具の土偶人を作る、と云っているのは、出典を明らかにしないが、もし元禄頃の草子本や、後の戯作類を根拠にしたものであれば、文献としての価値は心もとないものと云わねばならぬ。而し有阪与太郎氏がこれらの無価値に近い資料の類をとり上げることによって、幸右衛門の事績を否定しようとし、後の伏見人形を語る者をして幸右衛門抹殺説の根拠とし、それを定説の如くならしめたのは甚だしい錯覚といわねばなるまい。氏が戯作中の人物をとり上げて、幸右衛門は浮田家の家臣であるから、人形等を作る筈がないと云っているが、本来人形師である幸右衛門を、たまたま戯作者がとり上げて、主家の仇討をする浪々の武人に脚色したものであって、本末転倒の論である。伏見人形の初期に「でんぼう」と称するものがあって、草子本その他にも見うけられるが、語義不明のところから古来諸説紛々となっている。このでんぼう製作のため稻荷神社境内の池のほとりの土を採ったため、人々がでんぼうの池と称する様になったものである、稻荷社は庶民信仰の地であって、そこには知識的な要素は見られず、現在もいくつかの池があるが本来名称らしいものはなく、庶民達が勝手に呼び習わした卑俗な呼名がある許りである。後世でんぼう

の語義をもて余した文献学者が、でんぼう池の土をとったからでんぼうと称すると云う付会の説をたてているが、前記幸右衛門武人説と同様ものの順序が逆である。

幸右衛門の在世はおおよそ元禄を下限とし、摸倣追従者たる今戸の半七が享保中に土人形を初めているところから、数十年を溯る時代迄と考えるのが妥当と思う。浮説の如き浪人武士の片手間で造られる様な状態であるなら、伏見の如き技術の伝統を有する所では、もっと早く創出されなければならない。土製の二枚の型をもって如何なる形体の人形も大量に製形し得る体制を確立し、当時庶民の嗜好に投ずる清新な感覚の賦彩をもって、颯爽として江戸町民を初め時流を風靡する様な事業を創始したのは、並々ならぬ非凡の才能と見なければならず、若し幸右衛門を否定するなら、別個の人物を認めなければならないのである。幸右衛門の作を偽物と称し、幸右衛門の存在を否定する人も多い。而し偽物の存在によっては本物を否定しようとする論拠にはならず、単に偽物存在の証拠物件以外の効力はない。偽物によって作者を否定出来るなら、世に抹殺され得る芸術家は限りなく出来るであろう。残念乍ら文献は残されていないし、遺作の明証を欠くのも事実である。而し乍ら曾て知識層や上層階級との関連をもたず、ただ庶民が造り庶民が需めて伝えられて来た仕事に、文献の伝わらないのは当然至極であり、文献があれば先づ疑うのが正しい態度である。世に幸右衛門の作と称するものは相当数あるから、それらを比較研究した上でなければ、軽々な判断は下すべきでない。偽は真の反対概念として成立つので、真ににせる行為を指すのであるから、対象としての本物が予期されていなければ偽物の概念は成立しようがないのである。だから概念の上では本物の成立は既定の事実であって、世上に流布される多くの偽物は本物存在の裏付けである。伏見人形の世界では古来、人形屋幸右衛門は觀念の上に実在し続けて来たのである。具体的な現実とどの様に結びつけるかの問題が残されているにすぎない。有阪氏の如く「幸右衛門作と呼ぶものは尽く後人の偽物である」と断ず

る根拠はどこにもない。

古代希臘のイリアッドやオディッセイに対し、ホーマーが創作したと云う明徴はなくとも、ホーマーを抹殺することは出来ない。世に伝記不明の人物は数多いが、史実にこだわって幸右衛門を否定するなら、ホーマーと同様でなければならぬ。伏見人形は庶民的生活環境から必然的に派生し、文化の上層部の関知しないところで生き続けて来た為、記録文献が残り得る要因は何一つ見当らないのである。かくまで庶民性の特色の強い世界では、口碑伝説としてわざわざ仮空の人物を仕立てて迄、偶像を求める理由はあり得ない。庶民の社会にあって庶民の鑑賞に投じ、庶民の喝采を博する仕事をなし遂げた人物を後の世まで伝承して来た庶民の感情に対しては、何ら疑をさしはさむ理由がない。ホーマーの古代希臘文学の世界における如く、伏見人形の黎明期に偉大な業績を残した人物の存在した事を裏付けるものである。イリアッドとオディッセイとの間に一世紀の距りがあると云う説がある。もしそれが事実として確認されるなら、古代希臘は偉大な二人の詩人をもつ事が出来たのであろう、それを私は信ずることが出来る。「かかる問題を論争するには余りに人生は短かい」と云うのは、ホーマー論争に対するセネカの言葉であったが、ホーマーを疑い通して、抹殺することの出来る人のみ、人形師幸右衛門を疑う権利をもつ事が出来るだろう。

IV. 製品の種類

伏見人形初期の品種を、今日遺品によって確認することは不可能に近い。幸右衛門以前の時代には岩絵具で彩色された、手造りの芸術的作品も作られた様である。前掲室町末期からの深草焼の技術的進歩は、茶器、手焙り、土風呂等、雲華焼に似た製品が造られ、与九郎、宗三郎等の作者名や款印も残されている。それらの系列の粗雑な日用品土器の類が、完成期前の押型製品と共に、稻荷の門前でひさがれたものであろう。幸右衛門時代の型成形技術の革新的な進歩により、伏見深草の陶工は競って其法に倣い、型物が急速な発展をとげて

此地を人形生産の中心地と化したのである。

「小野炭焼深草土器商七小町」と云う出雲の浄瑠璃によると、炮烙、炭消、油注の実用品、壺々、人形、鳥、獸のわらべだましの玩具類、稻荷神社の使わしめとある信仰関係のものが記されており、真頼翁の志料には幸右衛門について、「その作るところのもの土偶人及禽獸又祭器に用いる盞、壺を製す——何れも世の喝采を得し名工なり」とある。陶器辞典は初期の製品として、狐、布袋、でんぼう、つぼつぼ、柚、おやま、牛、西行、土鈴の九種を、又近代のものとして布袋、狐、でんぼう、西行、撫牛、ちよろ、叶福助、饅頭喰、つぼつぼ、かまかま、柚、成田屋人形、曾我の対面、鳩、鈴、蔵、雛、おぼこ、角力、馬の二十種を上げている。現在行われているのは数十種にすぎないが、昭和三十六年に開催した伏見人形展においては、大西家は平素使用しない形式のものを多数製作し、又高繩町に住む上田老の協力もあって約二百種の作品が揃ったが、恐らくその過半は将来再び作られる機会はなかりうと思う。因に未調査ではあるが、大西家に所蔵する古型は尚数百種を数えるであろう。今それらの品種から概略の形式を分類して見る。

1. **実用品系**、初期的稚拙な土器製実用品、炮烙、田炮、胡麻煎り、火吹筒、鈴、庫
2. **信仰呪術系**、稻荷信仰に結びつく狐、玉等が、実用品系列のものと共に店頭之列べられ、型の技術的発達に伴い品種を増して行く、幸右衛門稻荷等の狐の形式が伝えられている点よりして、発祥年代の古いことを物語っている。

狐、玉、天神、布袋、牛、西行、狛犬、友引（五人子）、俵牛

3. **招福吉祥系**、素朴原始的信仰から、ゆとりを見せる非直接的信仰系が展開し、或は縁喜ものとして幅広く浸透して行く
七福神、福助、お多福、撫牛、高砂、亀、五猿、ピンピン鯛、鯉の滝昇り、三番叟、獅子舞、ちよろ、小判狐、招き猫

4. 説話、伝説系、成型法の進歩がますます形式を複雑化し、教訓、その他文学的内容の表現を試みるに至る。

饅頭喰、二十四孝、曾我対面、盗賊児童、三条小鍛冶、玉取童、狐馬のり

5. 装飾鑑賞系、享乐的な庶民文化の動向も伺うことが出来る段階で、純鑑賞形式の成立には、技術的進歩に対する、消費生活の向上が伴った事を証明するものである。

歌舞伎人形、角力、太夫、おやま、おぼこ、飾馬、十二支

6. 玩具系、初期から存在しているものであるが、庶民生活の向上が、彼らの生活の中に雛人形、五月人形等を持ち込むに至るのは、多少遅れるものと想像される。

鳩笛、袖でんぼ、犬、内裏雛、大将人形、みこし、かまど、めんこ

以上のほか、上記の総合的な品種も数多く見られ、又本来の目的以外、単に土産物としての目的に利用される場合も夥しいものであろうと想像される。その他これら何れの分類にも属さぬ特殊な目的のもの、珍品、奇種に類するものも若干は作られたらしい。型の大小を含めて数えるならば、創始以来造られた伏見人形の形式は実に千を超すべく、渺たる郷土玩具、土人形といえども、造型史上まれに見る膨大な体系と云うべきであろう。又それら一々の作品の目的には、当時の庶民階級の思想信仰、風俗習慣、世態人情、趣味好尚等、歴史の表面に現われる事のない社会層の実態がうかがわれて興味深いものがある。

V. むすび

伝統的工芸の当為の問題としての観点から、伏見人形を考えねばならない段階に及び、尚未完の問題点を残しつつ、紙数の多くを技葉の事柄に割いた事を遺憾としたい。伝統的工芸共通の問題と共に、伏見人形独自の課題も数多くあるが、先づ技術的観点からの検討は第一の要点であろう。大西家現在の窯炉が天井のない筒ぬけの窯であることは、窯内熱効率の点から見て驚くべきものである。その素焼製品は焼成中の焰につつまれ真黒になるが、最終段階で天井に

ぬれむしろを覆うことにより、還元作用で白くしている様である。低火度焼成のため破損し易いが、こわれれば再び稲荷山に戻って土となると云う、云い伝えの習慣的隋性で今に改められない。現在稲荷の社前で売られている狐、瓶子の類は、石焼きの堅牢なもので占められ、それら瀬戸、多治見からの移入品によって販路を荒されている点を充分考慮しなければならぬ。離型用のキララ粉、接着用の膠、その他材料、製法の全般に亘って旧法の踏襲が多いが、腐敗、凝固、非耐水性の膠の欠陥は改めるべきものと思う。

工芸の意匠、感覚としての観点からは、商品市場に優劣を争う根本問題であるが、嗜好動向、市場調査を考慮されず、着彩方法等も先代以来の遺訓として伝統墨守の方針をつづけている。博多人形初期の着彩は「へそくり草」を彩料とし又化粧土の火色による、渋いものであったのを、大衆の嗜好に合せて批難をうけたが、それは博多人形今日迄の繁栄の因となった事実も注目し度い。有阪氏の「伏見人形」には「ひとり伏見人形は時勢の推移を知らず、遅々として低迷を続け云々」とあるのも意匠感覚面の問題が多く、武井氏の「郷土玩具」は博多人形について「郷土的乃至芸術的価値からは甚しく質を低下して、単に綺麗なお土産として俗物の賞讃を受くるにすぎない」と云いつつ、各地土偶が時代錯誤に陥って氣息奄々たる中に、超然として時好に投じて榮えている実状を認めている点も参考とすべきである。その形状についてはすでに数種の試作を試み検討中であるが、色彩の場合の如き感覚的要素は乏しい。

博多の初期は一品作であるが、伏見は早くより大量生産の進んだ方式で成功している。而もそれは同時に大量消費に結びつける、種々の巧妙な考慮が用意されて居り、廉価に売る事が出来て消耗品の如く考えられていた。「でっちでんぼう稲荷の土産、おとしたらわれる」と云うわらべ唄に仕組まれ、子供らは取り落せば直ちに当然の如く次を買求めるのであった。こわれて再び稲荷の土になると云う不合理は、いささかも意に介されていなかったのである。布袋、鳩その他、一個を求めれば更に二個乃至十数個を求めねばならない様な購

買心理に仕向けられ、消費者にとってそれが合理化された形で受けとられていた事は驚嘆すべき知識であった。

伏見人形の窯元は明治初期に五十軒、大正中期四十二軒、昭和五年に十窯元が存在したが、今次の戦争には殆ど潰滅的打撃をうけて、現在僅か一窯元を残すにすぎない。当主は販売上の巧妙なトリックを用いる人柄ではないが、斯業の将来の為には新しい時代の流通体制についても考慮を煩わし度い所である。今日的な意匠の意味は、消費調査、流通過程、製産方法等を含めた全体と考えねばならず、結論には時日をかりねばならないが、昔日の盛運を回復して先人の功にむくいたいと念願している次第である。終りに伏見人形現在の形式の成立については、文政、天保の頃の人、奥田颯川の門人陶工欽古堂亀祐の業績によるものが多大であった事、又手元にない文献は孫引きによるものが多いが、研究上重要と思われるものは列記した点を付記しておく。

伏見人形に関する文献

本朝陶磁攷(考)証

日本陶誌(大正五,大西林五郎)

日本陶工伝(大西林五郎,藤井理伯)

府県陶磁沿革陶工伝統誌

陶器図録(昭和十三,雄山閣,卷一)

陶器講座(〃 〃)

京窯古今泥中閑話

日本山海名物図絵

陶器大辞典卷一,五

日本書紀(雄略十七年三月戊寅)

大概抄

日次記事

工芸志料(明治十)

工芸鏡

美術年契

百科大辞典(第一卷)

人形集成

うないの友 (清水晴風)

雑誌「上方」四七号 (昭和九)

伏見人形 (昭和四, 有阪与太郎)

日本郷土玩具 (昭和五, 武井武雄)

伏見人形の話 (昭和三六, 田中緑紅)

京都府伏見町誌 (昭和四, 高橋真一)

紀伊郡誌 (大正四)

新編日本人形史 (山田徳兵衛)

歌舞伎狂言細見 (大正八, 飯塚友一郎)

案内者 (寛文二, 中川喜一)

俳諧歳事記 (其角)

誰袖海

愚雑俎卷二

国本国参考

濑川兩岸一覽 (文久三, 曉晴翁)

堀川の水 (元禄七)

西鶴, 好色五人女 (貞享三)

〃 西鶴織留 (元禄七)

花風, 五箇の津余情男 (元禄十五)

乙州それぞれ草 (享保四)

江島其磧, 世間手代気質 (享保十五)

〃 傾城禁短気 (正徳元)

竹田出雲, 小野炭焼深草土器商七小町

上方ばなし (三十六集)

大阪軍記

仇討天下茶屋譚

奈川亀輔並木十輔, 大願成就殿下茶屋聚 (天明元)

春樹元輔, 長岡力作, 大願成就, 殿下茶屋聚 (天明二)

住吉詣殿下茶屋村 (享保二十)

住吉奉納連歌茶屋誉文台 (天明元)

佐川藤太, 近松梅枝

堺街道に天下茶屋

伏見街道に人形屋

} 住吉詣婦女行列 (文政元)

近松政橋, 奈河一泉「慶長年間忠孝仇討 絵本殿下茶屋聚 (天保三)